

特集 2

戦前の在日朝鮮人ハンセン病患者の発病と入所経緯

金 貴粉

要 約

日本国内のハンセン病療養所には多い時には700人以上の在日朝鮮人が入所していた。在日のハンセン病発病率が高いのは、この病気が栄養や衛生状態が悪い場所で発病する可能性が高く、植民地支配下において生活水準を低く押し下げられていたためである。

本稿では、戦前、日本のハンセン病療養所に入所せざるを得なかった朝鮮人たちが、どのような経緯で入所し、日本による植民地支配といかなる関わりがあるのかという点について、これまで残されてきた朝鮮人入所者への聞き書きや療養所機関紙に掲載された文章を中心に明らかにした。

キーワード：在日朝鮮人 ハンセン病 患者

1. 本稿の目的

日本には現在、全国に14ヵ所のハンセン病療養所（国立13ヵ所、私立1ヵ所）がある。平均年齢が87.9歳（2023年5月）であり、全入所者数812名（2023年5月1日時点）の内、朝鮮人は31名（2023年8月時点）を数える。

筆者は、2005年からハンセン病資料館で勤務し、まず疑問に思ったことは療養所内の朝鮮人入所者の多さであった。何故、これらの人々は日本の療養所で生活しているのか。

全生病院（現・多磨全生園）の『年報』によると、1922年には朝鮮人1名の入所記載があり、1909年開設の13年後にはすでに朝鮮人が入所していることがわかる。同じく1909年開設の外島保養院（現・邑久光明園）、第四区療養所（現・大島青松園）、九州癩療養所（現・菊池恵楓園）でもそれぞれ1923年から1926年の間にすでに朝鮮人が収容されていたことが『年報』によって確認できる。長島愛生園の療養所史である『隔絶の里程』によると、外国人患者（主に朝鮮出身）は、開所の1931年に15名だったのが、1948年には107名にも上り、当時の全入所者の7.8%を占め

たという。

邑久光明園入所者の具南順は、「私の周囲には多くの韓国人患者が見受けられました。そしてその事が私を一番驚かせました。私はこの療養所に百人に近い韓国人患者が居るなどは夢にも思っていないでした」[具,1961:64-5]と、多くの朝鮮人患者が入所していることに驚いている。同じく邑久光明園入所者の許順子は朝鮮人数の多さに、「その点お友達が多く心強い」[許,1962:43-4]と感じ、具南順は「何か力強いものを感じますと共に、異郷の地で大きな病を養っている人の姿に、自分の事を忘れて涙が流れて来ました。」[具,1961:64-5]と病気や療養生活への不安の中にも同胞がいたことに安堵している。

他園においても、戦後、朝鮮人はますます増えた。1962年11月3日発行の『在日朝鮮人ハンセン氏病患者同盟支部報』第51号によると、1962年時点での全療養所の朝鮮人入所者数は716名であったことがわかる。その後、減少していくが、その割合は1971年まで6パーセント前後を維持していたのである[金永子,2003:110]。

一般の日本社会に比べ、ハンセン病療養所における朝鮮人入所者数の割合は高かった。

なぜ、これほど多くの朝鮮人が日本のハンセン病療養所に入所しているのか。その点について、『隔絶の里程』には次のように記されている。

「戦前、朝鮮出身者のほとんどは労務者として故国を離れた人々であり、強制連行されてきた者も多い。なかには家族も知らぬうちに田んぼから拉致され、釜山港から麻縄で数珠つなぎされてきた者もいた」

[長島愛生園入園者自治会,1982:156]

「労務者」として苛酷な労働を強いられた人びとがハンセン病に限らず、病にたおれたのは想像に難くない。また、男性だけではなく、女性も日本で厳しい生活を余儀なくされる中で、療養所に入所することになった。

ハンセン病は、らい菌による慢性の感染症であるが、その感染や発病には環境が大きく影響する。このことから、ハンセン病患者に朝鮮人が多かった理由は、山田昭次がすでに指摘する通り、「日本帝国主義の苛酷な収奪」により、朝鮮民衆の生活が「低く押し下げられていたから」[山田1989:4]であると考えられるのである。

本稿では、戦前、日本のハンセン病療養所に入所せざるをえなかった朝鮮人たちが、どのような経緯で入所したのか。またそこには日本による植民

地支配といかなる関わりがあるのかという点について、これまで残されてきた朝鮮人入所者への聞き書きや療養所機関紙に掲載された文章を中心に明らかにしていくことを目的とする。

2. 先行研究と問題の所在

これまで、在日朝鮮人ハンセン病患者・回復者に関する記録は、歌集をはじめ、詩、評論・エッセイ等、当事者によって文学作品、評論を中心に刊行（自費出版含む）されており、当事者の思いが率直に綴られた作品が多い¹⁾。

その中で特筆すべきは、当事者自身が残してきた記録集である。中でも先駆けとなる『孤島』[呂久光明園韓国人互助会,1961]は、朝鮮人入所者自らによって「在日ハンセン病患者が辿った苦しみを書き、世に訴えるため」[崔,2007:260]に生み出された。『孤島』は、年金登場による経済格差が可視化される中、直接交渉と並行して在日ハンセン病患者が辿った苦しみを書き、世に訴えるということを行うことが主張され、聞き書き集として結実するに至ったのである。朝鮮人たちの入所経緯を始め、貴重な証言が編まれている点で貴重である。年金が1960年から入所者にも支給されることになったが、国籍の違いから朝鮮人には支給されず、園内で経済格差ができてしまった。この格差を是正する運動の過程で、在日入所者の生活記録を記そうと呂久光明園入所者の崔南龍が中心となり、作成された。2007年には、崔によって復刊されている。

ただし、在日朝鮮人ハンセン病患者史について体系的に記したものは、残念ながら僅少である。研究者による調査としては、立教大学の山田昭次ゼミナールによって多磨全生園入所者への聞き取りをまとめた『生き抜いた証に』[緑蔭書房,1989]がその嚆矢として重要である。また、金永子による多磨全生園の国民年金法成立による経済格差是正運動をまとめた論稿[金永子,1999]と、多磨全生園内に存在していた在日入所者の互助組織である「互助会」の活動について明らかにした論稿[金永子,2003]は、具体的な在日入所者の活動について明らかにした成果である。

以上のように、個々の研究については存在するが、断片的である。通史として包括したものは、拙著[金貴粉,2019]を数えるのみである。在日朝鮮人史研究からのアプローチについても、ほとんどなされてこなかったのは事実である。「ハンセン病」であるが故に、マイノリティ研究である在日朝鮮人史研究からも落とされてきたと言わざるをえない。わずかに日本のハンセン病史研究において、藤野豊による戦後の「らい予防法」制定の際に「韓国癩」が脅威とされたことについての指摘があるが、それも在日朝鮮人を主

体として描いたものではない。

本稿では、これまで明らかにされてこなかった戦時下においてどのように朝鮮人が日本の療養所に入所することになったのか、その経緯を中心に考察していきたい。残念ながら筆者がこれまでお会いしてきた在日入所者の方も鬼籍に入られた方が多いが、これまでお聞きしたことや証言集などから彼ら彼女らの姿を明らかにしていきたい。

3. 戦前の朝鮮人の発病と入所経緯

(1) 呉成六氏

1918年、朝鮮・忠清南道で生まれる。幼いころから家族のために実家の農家の仕事を必死で行い、13歳になってからはカセイソーダ工場、マッチの行商、ダム建設工事等、さまざまな仕事を行った。その後、日本の戦争拡大により、自身の住む村へも労務動員がはじまり、1943年頃からは若い働き手が日本に連行されていった。日本に渡った者から日本での苦しい生活実態を聞かされていたため、皆、労務動員から逃れたかったが、ついに呉にも海軍の徴用命令が1944年の秋に来た。自分が徴用されると家族の面倒をみる者がいなくなることを思い、その命を拒んだが、警官によるピストルでの威嚇によって捕らえられ、家族にも会わせてもらえないまま、着の身着のまま、汽車に乗せられた。呉と同じ村からは、18歳から31歳までの男性が35名集められた。釜山からは船に乗せられ、他の場所から集められた朝鮮人男女らとともに釜山から大阪、東京、横浜を経て、横須賀まで連れてこられた。その内、女性は静岡でおろされ、軍服縫製工場に送られたという。呉は横須賀で降ろされた後、トンネル掘りや軍艦造成、鉄砲での軍事訓練など、あらゆることをさせられた。言葉がわからない中、暴力をもって行動を律せられる場面が多々あり、亡くなる朝鮮人もいた。

このように2年間の徴用期限をもって、横須賀海軍工廠で労働していたが、1945年のある日、検診で左腕に斑紋があることがわかった。そして、横須賀の海軍病院でハンセン病と診断され、警察署から警官に付き添われて、東京の多磨全生園に強制収容されたのである。

呉成六は以上のように、海軍からの徴用命令により、横須賀の海軍工廠で労働を強いられたことがわかる。そして日本とともに連行された朝鮮人の中には女性もあり、それぞれ戦時下で日本のために働かされていたのであった。呉はその後ハンセン病の発病を確認するが、すでに朝鮮にいた頃からの過酷な環境下での労働もその要因として考えられる。工場での肉体を伴う仕事は呉が望んだものというよりは、家族や自身が生きるために必要なもので

あり、植民地朝鮮において、正当な対価が支払われない中で他の選択肢が得られない状況にあったことがうかがえる。そうした状況下で体がむしばまれていき、徴用での労働がそれに追い打ちをかけたと考えられる。

呉は、療養所に収容されてからほどなく、8月15日を迎えた。その時について、呉は次のように証言している。

「八月一五日は何をしていたかって？何もしていないよ。俺、病室に入っていたから。天皇陛下のラジオ放送、聴いたよ。12時、ちょうど12時だよ。俺、病室にいる時、聴いたもの。病室は朝鮮人、日本人、みな大勢いるんだ。すごいもんだよ。その時の気持ちかい？俺は戦争敗けてよかったよ。そうだよ。戦争勝ってみなさいよ。今、全生園いないよ、もう、本当。戦争敗けてよかったと、口では言えねえよ。これだけは言えねえよ。でもねえ、朝鮮人は百何名いたからな。百何名いて、他の朝鮮人もみな、俺と同じ気持ちだったと思うよ。」

[呉 1989 : 99-100]

呉はこのように正直な思いを吐露している。ハンセン病療養所といえども日本人入所者がその多くを占めており、日本社会の縮図であることを想定すると、たとえ日本の敗戦に対して肯定的な思いがあったとしても、それを口には出せない状況があることは想像に難くない。日本人の目もあり、朝鮮人同士が集まることは遠慮せざるをえない状況にあったと推測されるため、堂々と他の朝鮮人入所者と共に日本の植民地支配からの解放を喜ぶことは難しかっただろうが、その思いは言わずとも互いに通じ合うものであったに違いない。

(2) 李福相氏

李福相は、1918年、慶尚南道の蔚山で生まれた。李の実家は農家をしており、小作をしていた李は貧しい生活を強いられていた。そのような生活を送る中、1942年の秋頃に、李のもとに徴用の手紙が来た。同じ村からは李を含め、3名が徴用され、北海道の上砂川の三菱炭鉱で強制労働の日々を送ることになる。不衛生な環境下での日常生活と労働に加え、満足な食事も与えられなかったことにより、李の体は徐々に蝕まれていった。

あまりにも厳しい労働と規制に耐えかね、同胞の労働者とともに長崎に逃れ、土方仕事を行うことになる。ただし、そこもまた危険と隣り合わせの現場であった。全治3か月の怪我をしまい、その後は軍需工場へ働きに

いくこととなる。そうした中で、李は1945年8月9日を迎える。

「一服しながら話して、何となく部屋に入ったんだな。部屋に入って窓あけたらさ、そのうちに変な音が聞こえてくるのよ。その音がだんだん大きくなってくるの。聞いたこともない音なんだからな。これ何の音だって、みんな空を見とるんだけどな。そのうち、光がバーッと光ったんだ。原子爆弾が落ちる音なの。光がもうカミナリみたいさ。びっくりしちゃって、窓の下にしゃがんじゃったの。それで気を失っちゃって、気がついてきたら、じいっと聞いてると、工場の中に人が何人かおったんだ。助けてくれて声すごい。工場は鉄骨でできてて、家が工場の一部だったしさ、つぶれちゃったんだけどハリが窓に引っかかって……そうでなけりゃ俺も死んじゃったんだけどさ。」

[李,1989:103]

李福相もまた、呉成六同様、徴用により日本に連行された。北海道で正当な賃金も渡されずに過酷な労働を強いられ、その肉体は徐々に衰えていくことになる。その状況から逃れるために何とか長崎に渡るのだが、そこで被爆したのである。李の証言は生きていたことが不思議なほどに危険と隣り合わせの状況であったことを鮮明に伝える。徴用から被爆、そしてハンセン病の罹患という運命をたどらざるを得なかった背景には言うまでもなく日本による植民地支配があった。

(3) 李洛奎 (吉北一郎) 氏

1891年、李洛奎は朝鮮の平安北道で生まれた。9歳頃には書堂に通い、学んでいた。父は石炭採掘の事業を行っていたが、その事業が立ち行かなくなり、農家の仕事を行うこととなった。息子である自分も働かなくてはならなくなったが、わずかな田畑での農業では満足な収入を得ることは難しく、貧しい生活が続いた。

その後、父が亡くなり、家族の生活を支えるため、鉱山での採掘作業や炭鉱労働など、必死で働き続けたという。その後、朝鮮よりも日本の賃金が高いと聞き、よく考えた末、家族を連れて日本に渡ることを決心した。また自分と同様に渡航希望者を募ったところ、39人集まり、1917年12月末に釜山から下関へ渡ったのである。

その時のことを李は次のように記している。

「上陸したのは下関だった。すぐ門司へ渡り山の谷炭鉱に全員落ち着いた。

するとすぐ警察が来て、日本流の名前をつけるという吉北一郎から順々に十郎まで、残りの者は大谷という姓に朝鮮の自分の名の一字を加えて命名された。私たちはお盆までどんなことがあっても他へ行かないという契約をさせられた。」

[吉北,1971:24]

こうして、李の日本での労働の日々が始まったのである。作業賃は朝鮮よりは高額であったが、全部を現金で渡さず、一定額を切符で渡していた。

契約終了後には他の炭鉱を転々とし、岐阜ではダム工事も行った。その後、関東大震災にあう。李たち朝鮮人も仕事現場で大きな揺れを感じた。震災から3日後、警察が来て「朝鮮人はいまウカツに動いては危ない。震災後の帝都では朝鮮人排斥で、ヘタすると殺される」と助言してくれた。その後も石川県の白山ダム、新潟県の関山トンネル、山梨県のトンネルなど、全国各地で懸命に働き続けた。

その後、政府による樺太への移民計画実施にあたり、家の建築費や乳牛購入のための補助金を出すということを知った李は、ここを墳墓の地にしようと補助を受け、酪農を始めることにした。しかし、そのころから顔が腫れ、眉毛が抜けるといった症状が表れはじめた。発病3年目の1940年12月、警察により療養所に収容するという通知が来たため、入所することになったのであった。

李は、人生を振り返り、「私の長い一生は、貧乏と病苦で充たされています。しかしそのたたかひに屈せず、今日なお生きている喜びはとりわけ大きいのです」[吉北,1971:25]と語る。

療養所へ入所するまでの長い間、生きるために故郷朝鮮ではなく、日本で重労働を行わなければならず、その過程でハンセン病を発病したことは紛れもない事実であろう。李は化学療法が確立していない時期に治療を受けたため、視覚障害と身体障害を持つ身となった。入所しても療養所運営のための「患者作業」とよばれる労働を強いられたことは李をさらなる苦難の道に進ませることとなったのである。

(4) 金相権 (佐川修・飯倉峰次) 氏

金相権 (佐川修) は、1928年、朝鮮に生まれ、幼少時に親に連れられて日本に渡った。発病した時のことについて次のように語っている。

「私が発病したのは昭和20年の正月早々でした。一寸したいはずが過ぎ

て、右手を大きくやけどしてしまい、それが中々なおらず、あげくに顔一面にハンモンが出て非常に困りました。ちょうどその頃は戦争の真最中で、毎日のように空襲がありました。私の家は東京の亀戸にあり、私は千住のある工業学校に通っていたのですが、勉強や勤労働員の作業は、ほとんどする暇がありませんでした。そして遂に3月9日夜の大空襲で、私の家も焼かれ、その夜、私達家族はちりぢりばらばらになってしまい、やっと千葉の親戚の家にたどりついたのですが、その翌日私は千葉の大学病院で、らい病だといわれたのでした。その時17歳になる私は、らい病がどういう病気かということも全然知らず、ピンときませんでしたが、しかし重大な病気だということはおぼろげに感じていました。]

[飯倉,1956:200]

その後、金相権は病院から多磨全生園をたずねるが空襲で危険であるという理由で栗生楽泉園への入所を求められる。仕方なく家に戻ると、母から「いっそ空襲で死んでくれたらよかった。とてもこの病気は治らない。世間の人に嫌われて生きてゆけないのだから、死んだ方がよい。お母さんといっしょに死のう」といわれたのだった。その言葉を聞いた金は、無性に悲しくなり、「自分が生きているのはそれほど迷惑になるのなら、死んでしまおう」と一度は真剣に死ぬことを考えたのだった。しかし、なぜ、病気になっただけで死ななければならないか納得がゆかなかった金は、「草津にも療養所があるのならそこへ行こう」と決心を固め、栗生楽泉園に入所したのであった[飯倉,1956:201]。

金相権は戦争中であつた東京下町で暮らしながら、常に空襲の恐怖の中、生活せざるをえなかった。東京大空襲では妹も亡くし、失意のどん底にあつたに違いない。金の母親が「病気は治らない。世間の人に嫌われる」と言っているように他の日本人同様、朝鮮人社会の中でもハンセン病に対する偏見や差別が大きいという認識が強かったことがわかる。

金の母親の「死んだ方がよい」という言葉は、彼に大きな衝撃を与えた。しかし、その後彼は病気になっただけで死ななければならないことに納得がゆかず、歯を食いしばりながらも「生きる」ことを選択したのであった。

(5) 金玉先氏

金玉先は1920年に2番目の娘として生まれた。兄弟は兄、姉、弟、妹の5人おり、父は渡日した。9才の時、母を亡くし、祖母の元で育てられたが、1年後に栄養失調のため弟と妹を亡くす。その後、兄は養子に出され、姉は

結婚をして日本に渡った。14才の時、祖母を残していくことに心を痛めながらも生活のため、姉の招きで日本に渡り、その後17才で結婚した。

1938年頃、白い斑点が出るので病院に行ったところ、ハンセン病であると診断される。結婚後、二人の子供も授かったが、まだ5才の女の子と3才の男の子を残して1941年2月17日、療養所に入所させられたのである。療養所では、夫や子供のために全快を信じながら一生懸命治療に励んだ。戦時下で食料も不足する中、山の開墾や松根掘りなどの重労働に日本人、朝鮮人に関わらず心を合わせて朝から晩まで励み続けた。

しかし敗戦後、入園当時とは全く異なり、自分でも信じられないほど不自由な重症者になってしまった。顔や手足も生きているのが不思議なほど、変わってしまった。1947年に夫が突然面会に来たが、自分であることを認識してもらえないほどであった。夫と一緒に韓国へ帰るつもりであったのだが、その姿を見て、子供だけを連れ帰るといい、病気が良くなったら迎えに来ると言ったが、その後、消息が途絶えてしまったのである。[金玉先 1961 : 21]

金は、同胞患者の姿を見ながら次のように語っている。

「生活に追われて日本に渡って来て、十分な生活を築くいとまもないままに、真っ黒な絶望の世界へ投げ込まれた韓国人患者達の生活の事が、私の胸にいいようのない孤独感をさらに強めて私はやり切れない苦しみに発狂しそうになりました。」

[金玉先,1962 : 27]

このように、夫や子供をおいて、入所しなければならない若い入所者は少なくなかった。「発狂しそうになりました」という言葉から、いかに彼女が絶望の中に置かれたかということがわかる。それが、少しでもましな生活ができることを期待して渡ってきた朝鮮人の姿と重なり、さらなる孤独に追い込まれていったのだろう。

植民地であった朝鮮では、日々の生活を送ることさえも容易なことではなかった。それは多くの朝鮮人同様の体験であるが、たった一人の祖母を残していくことに心を痛めながらも、生きていくためにそうせざるを得ない自らの現実、そしてハンセン病の発病という現実、彼女の人生を底知れぬ塗炭の苦しみに陥れることになった。また、発病と入所は、家族の人生をも激しく翻弄した。5才と3才のまだ幼い子どもをおいて入所しなければならなかった彼女の思いはいかほどであったろうか。

岡山県に位置する国立療養所邑久光明園は、元来、大阪にあったという経緯もあり、在日朝鮮人の割合が高い療養所としても知られている。1962年の邑久光明園の統計では、全入所者900名中、約120名が朝鮮人であり、全体の1割以上を占めていた。

そこに暮らしていた金の証言は、朝鮮人女性入所者の発病と入所に至る経緯においても、日本の植民地支配が大きく関わっていたことがわかる。さらに戦時下の療養所における暮らしが辛く厳しいものであったことを訴えるのである。

(6) 具南順氏

具南順は、発病と入所前の状況について次のように語っている。具南順は、19歳の時に年老いた父母に連れられて入所した。

具は入所以前に自殺を思い詰めて、母の留守中に塩酸を飲んで多量の血を吐いたのであった。ハンセン病が「癩」と呼ばれていた時代、その告知は「癩の宣告」とも言われ、社会的な死を意味するほどの衝撃を患者やその家族に与えた。発病により、自殺を考えなかった者がいないとも言われる。具はその時の状況を次のように語る。

「私が発病したために母はすぐ下の弟を連れて私と3人で父や家族と別居しました。それは夜逃げ同様にして、誰も知らない土地へ移ったのですが、そこで私はエン酸を吞んで自殺を計ったものの死に切れずに、この島の療養所へ渡って来たのですから、もし仮に全快治癒したとしても一般社会へは帰る決心がつかなかったかも知れません。」

[具,1961:64-5]

具は入所後も十分に治りきっていないため、一週間位は、食事をとることもできなかった。回復後は何とか生きるために、必死で薬を求めたのであった。さらに具を苦しめたのは、周囲の入所者たちの姿であり、「治らない」ことへの苛立ちと絶望であった。

「自分の周囲の人が一夜のうちに全く変貌してしまう姿を目の当たりにして、その生地獄から逃れるために、あらゆる努力を重ねたのです。大風子油を多く注射することによって、それがそのまま治癒につながるとは決して思ってはいませんでした。しかし、じっと狂い死にを待っている事は出来ませんでした。」

[具,1961: 62 - 3]

たとえ、大風子油が治癒にそのままつながるとは思っていないとしても、わずかなことでもせずにはいられない彼女の焦燥感が読み取れる。具が入所したころの療養所内は太平洋戦争が終わった後であったと記されているが、まだ園内は戦争の影響が残されており、あらゆる物資が不足していたという。当時、唯一の薬であった大風子油が隔日にわずかな量を受けられるだけで、満足な治療にはほど遠いものであった。さらに食事も常に不足している状態で療養生活を送らなければならなかったのである。

(7) 金昌壬氏

多磨全生園に入所していた金昌壬は、1937年、16歳で結婚し、翌年女の子を授かったが、そのわずか1年後に発病した。夫婦が一緒に暮らしているのは、この病気は治らぬと言われ、夫は外で働くようになり、その後音信不通になってしまったのである。金はその後、太平洋戦争下で食糧の配給も少なくなり、薬代もままならず困り果て、警察に言って療養所に入ることを決心したのであった。幼い子供を母親にあずけ、全生園に入所したのは1942年のことであった。おいてきた母親と子供を心配しながらも療養所に隔離されているために、どうすることもできなかった。母親の看病が必要になった際も外出することもできず、やむを得ず「逃走」したために監禁室に入れられたのである [金昌壬,1989: 179-180]。

1916年、日本のハンセン病療養所では療養所長に対し、裁判を経ずに患者を処罰できる権利である「懲戒検束権」が付与された。懲戒検束規定にともない、全国の療養所と当時、植民地下にあった朝鮮の小鹿島にも監禁室が存在することとなった。

この懲戒検束規定により、子供や親に会うために、療養所から外に出ることも「罪」とされた。金昌壬もまた、不条理な思いを抱えながら、家族のために決死の思いで行動を決断したのであった。

(8) 許慶順氏

呂久光明園に入所していた許慶順は、子供時代に入所した。筆者が2008年3月17日にご本人から聞き取り調査を行った際、入所経緯について次のように語った。

「小学校四年生の夏休みの時に学校で検診があるんよね。そしたら眼科の先生が私の手を見て、「ちょっと」と言われて。そしてあんた帰りなさい

というねん。もうあんた学校来なくていいよ。と言われた。私は「学校こなくていいんやな」と喜んで帰ったん。そしたらそれから衛生課の人が毎日来て、ここへいくようにいわれた。それを両親が反対して。いろんな方法で拒否したんよ。あの時代は強制収容だから NO とはいえないもんね。それで、11歳の夏に8月の14日やったかな。昭和19年。大阪駅で待ち合わせして。そしたら18歳くらいの男の人やったかな。女の人と。3人でね。お召し列車でね。その時は母と、母の従兄弟と、大叔父さんと妹と私と4人で。電車の中では子ども同士、お手玉して遊んでたん。衛生課の方がむこうへいったら遊ぶところもあるし、2、3年たったら帰れるでしょ。といわれたからね。親はそれを信じたんやね。」

11歳で親元から引き離され、入所することになった許は、結局、当時の衛生課担当者から言われた2、3年で帰ることができなかった。そのまま70年以上もの間、療養所での生活を余儀なくされたのである。

(9) 金潤任氏

金潤任は、邑久光明園に長年にわたり暮らしていた。筆者が2008年3月16日にご本人から聞き取り調査を行った際、入所経緯について次のように語った。

金潤任は1930年、5才の時、母と当時2才の弟と共に日本に来た。父は滋賀県の石部という飯場で暮らし、土方仕事をしていた。百姓をしていた父は1925年、生活のため日本に働きに行った。5才で父親を頼り、日本に来たというが、それだけ朝鮮で生活していくことが困難であったことがわかる。百姓であった父親も日本で得た仕事といえば、朝鮮人労働者が多くいた土方仕事であり、それも家族4人がようやく暮らしていけるだけの状態であった。その後、母親がハンセン病を患い、まだ幼かった潤任が、母親の代わりに家事全般をしなければならなくなってしまった。学校に行くこともできず、家事全般を家族のために懸命にこなした。

1936年頃、母親の思いも空しく、警察が来て、療養所に収容され、家も消毒された。3年経ったら帰ってくると言っていたが、結局、それが母との別れとなってしまった。

その後、金潤任自身もハンセン病の症状が出たことに気づく。9才か10才の頃であった。膝あたりに10円玉位の白い斑紋が出た。親には同じ病気であることがわかると心配をかけると思い、言わずに一人で苦しんでいたが、15才頃、顔に斑紋ができてしまった。ハンセン病が「癩」と呼ばれていた時代、決して治らないと言われていた病気にかかったことは、将来への全ての望み

を失うことであった。ハンセン病にかかった母親を看病し、一番身近でその様子を見続けていたため、母と同じ病気になったことに自殺を考えるほどの衝撃であった。

娘もまた病気にかかったという事実、父親も母親が病気にかかった以上に嘆き悲しんだ。病気を治すために様々な怪しい薬を持ってきたが、治らなかった。

その後衛生課が来て、療養所へ収容されることになった。家に隠れているのも嫌なのと、1年で帰れるということから療養所に入ることに決めた。1941年2月に夜中一晚中車で走り、朝4時頃に岡山に着いた。虫明から船に乗る時には寒さも重なり、恐怖を覚えるようになってきたのであった。桟橋に着いたのは朝7時ころだったという。

日本の植民地期に入り、朝鮮では土地や仕事を奪われた人々が増え、仕事を求めて多くの人が日本に来ざるをえなかった。その中で朝鮮人たちは決して環境の良い場所で生活できていたわけではなかった。金潤任の父親も例にもれず、土方工事を行い、飯場で暮らしていた。ハンセン病は環境に大きく左右される病気であり、在日朝鮮人に多かったのはそれだけ生活環境が悪いところで暮らさざるをえなかったことがわかる。

入所後も、金の苦労は絶えることはなかった。戦争が激しくなり、園内でも一日中「患者作業」と呼ばれる労働を余儀なくされた。松根堀りや畑にするためにグラウンドを耕すことも行った。一日中仕事をしたあげく、夜には11時頃まで着物縫いや帽子編みをした。園から春秋の2回支給されていた浴衣や袴の着物も患者作業によるものであった。

また、恩賜会館を建てる時はその埋め立てを韓国入互助会が行った。朝4時半頃起き、朝御飯の時間までもっこを担いで平地にした。男性も女性も行ったので、休む時間がないばかりか、重労働ばかりで病気がますます悪化していった。実際に、1944年、45年頃は多くの患者が亡くなったのである。

4. おわりに一解放後も続く新たな闘い

以上のように、断片的ではあるが、戦前に入所した朝鮮人の入所経緯を中心に見てきた。戦時中に徴用され、日本に連行された後、発病した呉成六氏や李福相氏をはじめ、男性だけではなく、戦争や日本の植民地支配により、自らの意志とは反する生活を送らなければならない中でハンセン病に罹患し、療養所での暮らしを余儀なくされたことがわかった。女性入所者の中には、幼い子供をおいて入所せざるをえなかった金玉先氏や金昌壬氏、幼くして両親と別れ、一人で入所しなければならなかった許慶順氏がいた。その

ほかにも多くの朝鮮人入所者が経験せざるをえなかった事實は、日本による植民地支配とともに、ハンセン病政策が大きく関わっている。二重、三重にも及ぶ「生」の規律の中で生きざるをえなかったのである。

日本の敗戦も、多くの在日朝鮮人ハンセン病患者たちにとっては「解放」とはならなかった。在日朝鮮人として療養所で生きる中、金相権は「ハンセン病療養所に入所している在日朝鮮・韓国人にとって戦後数多くの問題が起きたが、なかでも出入国管理令による「らい患者の強制送還」と、祖国の分裂による一時的な思想対立、永住権申請などがもっとも切実な問題であった」と回顧している [金相権,1979: 243]。

これは、出入国管理令の第24条(1951年10月4日制定公布)において、日本国外へ強制退去させることができる外国人として「らい予防法の適用を受けているらい患者」と記載されたことに始まった。それにより、ハンセン病療養所に住んでいる朝鮮人患者たちは、強制送還されるとの危機感を抱き、多磨全生園の金哲元他77名が連名で国会に請願を行ったことが記録されている²⁾。

その後、朝鮮人患者にとって、辛く、長い闘いとなる年金問題が勃発する。1959年、国民年金法の施行によって、一級障害者に福祉年金(月額1500円)が支給されるようになったが、在日朝鮮人は年金支給対象から除外されてしまった。その事実に対し、これまで療養所内で共に生活してきた入所者間に経済的な格差が生まれ、療養生活を営む上で最も大切な人間関係に支障を来す大きな要因となった。全国の療養所では同様の問題が起り、これをきっかけに在日朝鮮人による患者組織が結成されたのである。

今回、李洛奎氏の入所経緯については、栗生楽泉園から発行された機関紙『高原』から知ることとなった。その文章は栗生楽泉園入所者5名で編まれた『トラジの詩』[皓星社、1987年]にも再掲されている。本書を出版する動機について、編者の金夏日は次のように記す。

「文集を作ろうと思いついたのは、李洛奎さんが書いた「私の歩んだ八十年」があったからです。李さんが吉北一郎という日本名を名のようになったいきさつを、ある日私に話してくれました。釜山から十三名が一行になって関釜連絡船に乗り込んだ。日本人の炭鉱監督が同僚に、「こいつらに呼びやすい名前をつけてくれ」「よきた」「なに、よきた、これは呼びやすくていいや、じゃあこいつが一郎だ」

たまたま李さんが一行の先頭にあったことから吉北一郎になり、二郎、三郎というように、順に名前がつけられたそうです。こうして李さんは日

本に渡り、炭鉱から炭鉱へと流され、過酷な労働を重ねた末に、ハンセン病を発病し、この療養所に送られて来たのです。

私が李さんと出会ったのは1962年頃ですが、当時すでに失明しており、耳もかなり遠くて、手足も不自由でした。でも炭鉱で働いていただけに、骨太ですごくがっちりした大男でした。私が楽泉園に入園した当時は、同胞が50名ほどいましたが、社会復帰したり死亡したりして、今残っているのは24名です。同胞の殆どが高齢者と呼ばれる年齢となり、不自由度もかなり進んでまいりました。30年、40年間の療養生活で、苦しかったこと、悲しかったこと、辛かったこと、その時々を思いを口述で懸命に綴ったものです。一人でも多くの人がお読み下さることを切望してやみません。」

[金夏日,1987:283-4]

平均年齢が88歳に近づいている今、朝鮮人入所者の多くも鬼籍に入った。日本の朝鮮人入所者の人々の記録は、当事者自身によってこれまで紡がれてきた。これらの記録に残されている人々との出会いは、改めて日本社会にハンセン病政策と日本の植民地支配を問い直す必要を訴える。

注

- 1) 朝鮮人入所者による詩、短歌、評論等にはこれまで次のような作品が刊行されている。奥二郎1958、『奥二郎詩集』私家版、金夏日1971、『歌集 無窮花』光風社、川野順(愈順凡)1972、『荊一わが半生記と折々の歌』私家版、金末子1983、『香山末子詩集 草津アリラン』梨花書房、韓億珠(岡一郎)2002、詩集『恨』土曜美術社出版、国本衛2003『生きる日、燃ゆる日 ハンセン病者の魂の軌跡』毎日新聞社、金泰九2007、『わが八十歳に乾杯 在日朝鮮人ハンセン病回復者として生きた』牧歌舎等がある。
- 2) 『参議院外務委員会会議録第六号』1952年2月26日

文献

- 崔南龍2007,「復刻にあたって」,『孤島』,解放出版社
 具南順1961,「一人の女」,『孤島』,国立療養所邑久光明園韓国人互助会
 許順子1962,「永い時間の中で」,『孤島(第二集)』,韓国人ハ氏病療養者の生活を守る会
 飯倉峰次1956,「いばら」,『深い淵から』,堀田善衛,永丘智郎編著,新評論社
 金昌壬1989,「苦難の中のオモニの愛」,『生きぬいた証に』,山田ゼミナール編,緑陰書房
 金夏日1987,「あとがき」,『トラジの詩』,トラジの詩編集委員会,皓星社

- 金貴粉 2019, 『在日朝鮮人とハンセン病』, クレイン
- 金玉先 1961, 「遠い雲」, 『孤島』, 国立療養所邑久光明園韓国人互助会
- 金玉先 1962, 「収容所」, 『孤島 (第二集)』, 韓国人ハ氏病療養者の生活を守る会
- 金相権 1979, 「朝鮮・韓国人と処遇の差別」, 『俱会一処』, 多磨全生園患者自治会, 一光社
- 金永子 1999, 「国民年金法成立とハンセン病療養所の在日朝鮮人」, 『四国学院大学論集』, 第 101 号
- 金永子 2003, 「ハンセン病療養所における在日朝鮮人の闘いー「互助会」(多磨全生園)の活動を中心にー」, 『四国学院論集』, 第 111 号, 第 112 号
- 李福相 1989, 「強制連行、被爆、それでも終わらなかった」, 『生きぬいた証に』, 山田ゼミナール編, 緑陰書房 長島愛生園入園者自治会編 1982, 『隔絶の里程』
- 呉成六 1989, 「山の中でつかまって日本へ連行、そして全生園へ」, 『生きぬいた証に』, 山田ゼミナール編, 緑陰書房
- 山田昭次「はじめに」 1989, 『生きぬいた証に』, 山田ゼミナール編, 緑陰書房
- 吉北一郎「私の歩んだ八十年」 1971, 『高原』 27 巻 5 号, 栗生楽泉園入園者自治会

Abstract

At one time, there were more than 700 Koreans living in Japan's Hansen's disease sanatoria. There was a high infection rate among Koreans in Japan because the disease is more easily transmitted in areas with poor nutrition and sanitation, and Japan's colonial rule of Korea had resulted in a low standard of living for Koreans in Japan. This article focuses on how Koreans in Japan were forced to enter leprosy sanatoria prior to World War II; how they entered these hospitals; connections with Japanese colonial rule; and articles published in the sanatorium newspapers.

Key words : Koreans in Japan, Hansen's disease, Patients

(キム キブン 津田塾大学)